

アメリカにおける Poe 評価の 変遷について

江 口 裕 子

今年の春 New York の北部 Bronx にある New York University 所属の Hall of Fame を訪れたときのこと。外遊の人々も足を運ばぬこの北部の heights の一劃に、建国以来アメリカの名を高からしめた政治家、宗教家、文人、科学者、教育家等八十三の胸像をならべた柱廊がある。文人の像は十八、一つ一つ見ながら Lowell, Longfellow の前になると、公德の正しいアメリカには珍しく誰のいたずらかは知らず、この二方の尊像の顔のまんなかに泥土がぐしやりと投げつけてあって、あたら名誉の鼻もつぶれた形であった。故意か、悪戯の偶然か、アメリカ文学の評価が Lowell, Longfellow, Whittier 等かつては New England 中心の文学史上の権威があった人々に幸いしない現在の趨勢に思っていたって、いささか感慨なきにしもあらずであった。

1900年に始めてこの柱廊をかざる名誉の人々の投票のあった折、Emerson を始め、Hawthorne, Longfellow, Lowell, Whittier 等は異議なくパスしたが、Poe はその年も、1905年の第二回の投票にも失格しており、やっと登廊を許されたのが10年後の1910年のことであった。これを皮肉った Walter Hines Page の言い方が面白い。

Edgar Allan Poe might be described as the man who made the Hall of Fame famous. He made it famous for ten years by being kept out of it, and he has now given it a renewed lease of fame by being tardily admitted.¹⁾

1905年の *Current Literature*²⁾ によれば、この投票の結果にかなり烈しい論争がおこり、それは Poe の除外ということに集中されたという。San Francisco *Argonaut* 誌と、London *Spectator* 誌は Lowell や Whittier が選ばれているのに Poe が除外されたのは納得がゆかぬと、後者は、

The preference of Whittier to Poe is remarkable, if literary genius is to be taken as a test of merit. It seems to indicate that character is regarded as an indispensable passport to the Hall of fame.³⁾

と苦言を呈し、The St. Louis *Mirror* 誌は “Poe is our greatest artist of the imagination, as Hawthorne is our greatest genius. Both are universal in their appeal and beyond the power of any committee, however parochial, to place or rank them.”⁴⁾ 又 The Columbia (South Carolina) *State* 誌はこの投票には “the venom of sectional prejudice”⁵⁾ が認められると喝破しているが、不当をならしているのはいづれも New England 以外の地域の批評壇であり、このことは今世紀の始めにおいても尚 Poe の芸術 proper の真価が、人物性向を作家の評価に欠くべからざる規準の一つとする New England の批評界の倫理性重視のため不当に過少評価されていることへの、第三者的立場からの批評の現われと見ることが出来よう。Poe が Hall of Fame 入りをしたのが 1910 年であり、その前年が Poe の 100 年生誕祭であった。してみると Poe の作家として活動した生前を含めて約一世紀のアメリカにおける Poe の評判は、今は local sage にすぎぬといわれる Lowell や、Whittier を下廻っていたことになる。これが Poe の正当な評価であろうかという疑問は誰の心にもおこるのではなからうか。

Poe の死後、彼に対する評価は Rufus Wilmot Griswold の有名な “Memoir” (1850)⁶⁾ における意図的な歪曲に始まって、アメリカ文学史上かつて例を見ない毀誉褒貶の歴史をくりひろげてきた。Griswold の Poe の人物描写や批評は、死後約 30 年間は Poe 批評の根拠となる権威ある資料と見なされて、数多の Poe の伝記や批評はこれに基いて書かれたため、Poe の人物性格にはとかくいかがわしい悪徳の影がつきまとい、人格円満、家柄素性を尚ぶ New England の紳士の理想像からはおよそ縁遠い浮浪者的な人物として、「お上品な」人々を擧蹙させてきたのが事実であった。Griswold は当代の聖職者であり、同時に journalist として文学批評や編纂に携っていた、かなり著名な New England 人であり、彼の Poe をおとし入れる企図は、当時 New England 一般の Poe へ

の反感にも支持されて功を奏したという外はなく、それから約半世紀へた後も偏見は完全に跡をたったとはいえない。今世紀に入って漸く Poe 個人とその生涯に関する Griswold 的伝説は次第に洗い流される一方、長年の検討に濾過された Poe の作家特に批評家としての真価が輝き出て、改めて彼の声名を決定する規準となったというべきであり、Arthur H. Quinn 教授が Poe の原文と Griswold の補筆変改した書簡を並べて Poe にまつわる汚辱を決定的にそそいだのはまだ 1941 年のことである。⁷⁾ いずれにせよ 1910 年の Poe の Hall of Fame 入りはアメリカにおける Poe 評価の歴史上の一つの monument、一つの道標としての意味を見てもよいのではなからうか。

Poe のアメリカ文学史上の位置づけをするのは未だに困難であり、アメリカにとって *Out of space, out of time* の Poe という伝統的見方を根底から覆すに十分な証拠と革新的な意見は私の知る範囲内では多いといえない。私には従来の New England 的な見方に立つて Poe をアメリカ文学の土壤に咲いた全く異質の作家と断定するには疑問が残り、さればといって彼を北部と相容れぬ南部の文化的伝統を受けて育った作家として定着してしまうには余りにヨーロッパ的乃至は cosmopolitan 的要素が顕著である。唯私にいえることは今までのアメリカ文学史は余りに北部中心の文学史でありすぎ、北部の文化伝統に育くまれた史家や批評家が多く、又出版業者、編集者も北部に集中した観がある。今世紀の始め Harvard 大学の Barrett Wendell 教授が、*A Literary History of America* (1900) を出版した折 Fred Lewis Pattee がこれを *A Literary History of Harvard University, with Incidental Glimpses of Minor Writers of America* と評したが、事実この文学史は 530 頁の中 15 頁を西部に、21 頁を南部のためさいただけであり、Pattee 自身も New England 出身の学者であった点からみても、彼の批評は偏見とは思われない。文学史のみならず、アメリカの歴史そのものが常に南部抑圧の歴史であったことは否めぬ事実であり、Poe が始めて国際的声名を勝ち得た南部出身の作家であったことを認めてよいとすれば、その南部の代表作家の額をかざったのは laurel ならぬ茨

の冠であり、それをあたえたのは New England 派の文人であり、史家であったと言える。社会的にも文化的にも終始一貫して北部の伝統と主張とは相容れぬ立場をとり、Boston 人を Frogpondians, 又 Transcendentalists を Crazyites と貶した Poe への評価は不当に苛酷であり、又その評価は必ずしも Poe 個人のみならず、北部の南部（その他の地域をも含めて）無視又は抑圧の反映であったともいえるであろう。いづれにせよアメリカの文学者の中で Poe ほど熱烈な賛否両論の対象となったものは例を見ず、又従来問題とされたような Poe の作品の難点は認めるにしても、それ程内外からの論議が今だに絶えぬということは Poe への関心が絶えぬということであり、又それは Poe のような創造性と pioneer 精神をもった作家のみの包蔵している牽引力というほかはないであろう。Poe がどのアメリカの classic 作家よりも多く読まれてきたという点に重要な意味がある⁸⁾と J. W. Krutch 教授が述べていることにも言及しておきたい。

1827 年から 1849 年にかけての Poe の評価

Poe のアメリカにおける評価はどのような変遷をたどったかという題目について、必要に応じて海外からの批評をも含めながら概観を試みたいと思うが、先づ Poe は生前、同時代の人々から如何なる批評をうけてきたであろうか。

Poe の作家的生涯は 1827 年の第一詩集 *Tamalane and Other Poems* から 1849 年にかけての僅か 20 余年であり、Poe はその間、現在知られている様に詩人又は物語作家として有名というよりは、寧ろ批評家乃至 journalist として世間に認められていた。特に詩人としての Poe は晩年の “Raven” の出版までは殆ど無視されていたとあってよい。Poe の第一詩集、及第二詩集 *Al Aaraaf, Tamalane and Other Poems* (1829) 共に殆ど世人の注目をひかず、後者に対して John Neal が “nonsense” だが少くとも “exquisite nonsense”⁹⁾ だという評言を呈した位で、1842 年 Griswold の編纂になる当時の大きな anthology であった *Poets and Poetry of America* の中にも彼の詩は三つしか採録されていない。第三詩

集 *Poems by Edgar A. Poe* の中には “Helen”, “Israfel”, “The Doomed City”, “Irene” 等、Poe 最上の詩の幾つかを含んでいるにも拘らず、之も殆ど認められずに終ったことは、1840年代のアメリカの文学の鑑賞力の程度を雄弁に物語るものであろう。Poe が一躍詩人としての名声を内外に馳せたのは 1845年 “Raven” が公けにされた時であるが、その榮譽も永続的なものでなかったことは、同年の秋の詩集に再び現れたとき、当時の有力な雑誌 *Graham's Magazine*, *Whig Review*, *The North American Review* 等 いづれも沈黙してこれに触れず、*The Knickerbocker* の L. G. Clark による “. . .no reason why they might not have been written at the age of ten.”¹⁰⁾ という如き酷評まで現われていることでも肯ける。Poe は物語作家としてはより世間的に成功して居り、1833年には *The Baltimore Saturday Visiter* の懸賞小説に応募して “The Perloined Letter” で賞金を獲得して、John P. Kennedy から “. . .eminently distinguished by a wild, vigorous, and poetical imagination, a rich style, a fertile invention, and varied and serious learning.”¹¹⁾ という賞讃を得たのを始めとして、*The Tales of the Grotesque and Arabesque* の出版も好評を以てむかえられた。1843年には “Gold Bug” により *The Philadelphia Dollar Newspaper* から百ドルの賞金を勝ち得たが、この時が物語作家として盛名の極まった年であり、翌々年の “Raven” の評判と相まって、この前後が作家として最も得意な時期ではなかったかと思われる。

次に批評家としての Poe の活動が世人の関心を惹くようになったのは、1834年 Richmond で創刊された *The Southern Literary Messenger* の編集助手として、同誌に詩文と共に批評を寄せるようになって以来である。Poe の詩や物語があまり認められず、journalistic な批評が注目をひいたのは、それが極めて大胆にして奇警、痛烈にして好戦的な性質の故もあり、又彼のすぐれた分析能力や、論理的な正確さが批評家としての Poe を逸早く世人に認めさせることになったためでもあろう。しかし又 *The Southern Literary Messenger* の創刊者 T. W. White を始め、南部の読者層に

は有能な *journalist* としての外、Poe の芸術家としての天分を正当に値踏みする鑑識力が欠けていたということも事実であろう。Poe は *The Southern Literary Messenger* と 2 年後に袂を別った後、*Burton's Magazine* (1839)、*Gentleman's Magazine* (1840)、*Graham's Magazine* (1841-1842)、*Broadway Journal* (1845) 等の編集者とし批評の筆をふるったが、彼が *journalist* として機敏にして果敢な才幹をそなえていたことは、例えば *Graham's* 誌に彼の不敵な批評や、分析に長けた評論、物語が次々現われて読者を瞠目させるようになって僅か 2 年足らずの間に、購売予約者の数が五千部から五万二千部に増加したということも、新しい編集者としての Poe に負う所が多大であったことは確かである。

Poe は当時の読者の好みに投ずるには高すぎる批評の規準によって鋭利な裁断を下すのに容赦なく、Irving, Hawthorne, Cooper 等の長所を認めるのにも吝かではなかったが、当時有力な *New-York Mirror* の編集者 T. S. Fay の小説 *Norman Leslie* (1835) を攻撃したり、Longfellow をひようせつのかどで責め、Griswold の *Poets and Poetry of America* の編纂に手厳しい批評をしたのを始めとして Channing, Emerson 等 New England 派や、New York 派の代表作家に対して恐れ気のない、正攻法の批評を試みたため、当時の有力な作家、批評家の間に多数の敵を作る結果となった。Dr. Snodgrass は Poe を評して “Provokingly hyper-critical at times”¹²⁾ といい、又 Poe の編集する *Broadway Journal* について “It would be more significant to call this the Broad-axe Journal.”¹³⁾ と皮肉っている。

同時代人の Poe への批評として最も注目に値いするのは James Russel Lowell の批評であり、Poe が “Raven” を発表した 10 日前、1845 年 2 月の *Graham's* 誌に現れたが、後に Griswold 版の Poe 全集の中に収録された時には内容に約三分の一の削除と加筆があって original なものとはかなりその意見を異にしている点が注目される。*Graham's* 誌において彼はかなり寛大な態度で Poe の批評家としての天稟を高く評価していることは、

Mr. Poe is at once the most discriminating, philosophical, and fearless critic upon imaginative works who has written in America. It may be that we should qualify our remark a little, and say that he *might be*, rather than that he always *is*, for he seems sometimes to mistake his phial of prussic-acid for his inkstand. If we do not always agree with him in his premises, we are, at least, satisfied that his deductions are logical, and that we are reading the thoughts of a man who thinks for himself, and says what he thinks, and knows well what he is talking about. His analytic power would furnish forth bravely some score of ordinary critics. We do not know him personally, but we suspect him for a man who has one or two pet prejudices on which he prides himself. These sometimes allure him out of the strict path of criticism, but, where they do not interfere, we would put almost entire confidence in his judgments. Had Mr. Poe had the control of a magazine of his own, in which to display his critical abilities, he would have been as autocratic, ere this, in America, as Professor Wilson has been in England; and his criticisms, we are sure, would have been far more profound and philosophical than those of the Scotsman. As it is, he has squared out blocks enough to build an enduring pyramid, but has left them lying carelessly and unclaimed in many different quarries.¹⁴⁾

の一文にもうかがわれよう。彼はこの原文においても Poe の批評の峻烈さや、偏見について言及して居り、この見方は最後まで Lowell の Poe 観として動かなかつたが、Poe の論理性や、分析能力を批評家の強みとして敬意を払っていることは分る。又彼は作家として Poe が天才と呼ぶに足る二つのすぐれた能力 “faculty of vigorous yet minute analysis” 及び “wonderful fecundity of imagination” を兼ね具えた作家であり、例えば “Helen” の詩に対しては “The grace and symmetry of the outline are such as few poets ever attain. There is a smack of ambrosia about it.”¹⁵⁾ 又 “The House of Usher” についてはその “serene and somber beauty” の魅力を指摘して、Poe がもしこの作品以外に何も書かなかつたとしても、彼を天才且つ古典的文体の巨匠と評価するに足ると称揚する。尚次の一文は Poe の作家としての特質の明察ある批評として引用するに足ると思われる。

In his tales, Mr. Poe has chosen to exhibit his power chiefly in that dim region which stretches from the very utmost limits of the probable into the weird confines of superstition and unreality. He combines in a very remarkable manner two faculties which are seldom found united: a power of influencing the mind of the reader by the impalpable shadows of mystery, and a minuteness

of detail which does not leave a pin or a button unnoticed. Both are, in truth, the natural results of the predominating quality of his mind, to which we have before alluded, analysis. It is this which distinguished the artist. His mind at once reaches forward to the effect to be produced. Having resolved to bring about certain emotions in the reader, he makes all subordinate parts tend strictly to the common center. Even his mystery is mathematical to his own mind. To him x is a known quality all along. In any picture that he paints, he understands the chemical properties of all his colors. However vague some of his figures may seem, however formless the shadows, to him the outline is as clear and distinct as that of a geometrical diagram. For this reason Mr. Poe has no sympathy with *Mysticism*. The Mystic dwells in the mystery, is enveloped with it; it colors all his thoughts; it affects his optic nerve especially, and the commonest things get a rainbow edging from it. Mr. Poe, on the other hand, is a spectator *ab extra*. He analyzes, he dissects, he watches.

... with an eye serene,

The very pulse of the machine,

for such it practically is to him, with wheels and cogs and piston rods all working to produce a certain end. It is this that makes him so good a critic.¹⁶⁾

とのべているのは、Poe のえがく神秘幽玄の世界が emotion や passion にかり立てられた、渾沌とした心的状態から生まれるものではなく、実は冷徹な批評家の隅々まで行きとどかぬ所のない慧眼のもとに書かれたものであり、あらかじめ設定された plot や、雰囲気の統一にむかって素材を選択し、排列し、組成してゆく演繹的手法を解析し、Poe が不断にめざめた「自意識」の作家であることを指摘したもので Lowell の批評眼の的確さを示してくれる。因みにこの批評は Poe が *The Philosophy of Composition* (1846) で有名な “Raven” の創作過程を開陳する以前のものであることはいうまでもない。

この Lowell の批評が Poe の死後、1850 年の Griswold 版全集に収められた時には、最初にあげた Poe の批評家としての才幹を強調した重要な一節が全部削除され、その他数ヶ所の削除の外 Poe の将来性を期待する旨の最後の二節の代りに、原文にない次の如き部分が加えられてをり、

As a critic, Mr. Poe was aesthetically deficient. Unerring in his analysis of dictions, meters, and plots, he seems wanting in the faculty of perceiving the profounder ethics of art. His criticisms are, however, distinguished for scientific precision and coherence of logic. They have the exactness, and, at

the same time, the coldness of mathematical demonstrations. Yet they stand in strikingly refreshing contrast with the vague generalisms and sharp personalities of the day. If deficient in warmth, they are also without the heat of partisanship. They are especially valuable as illustrating the great truth, too generally overlooked, that analytic power is a subordinate quality of the critic.¹⁷⁾

と、Poeの批評に芸術の倫理性への認識や、人間的温情の欠けていることを指摘し、先にほめた分析力にけちをつけており、結論の印象は原文と比べて著しくPoeに不利なものになっている点が注目される。

蓋しLowellはPoeに積極的な敵意こそ抱かなかつたが、Poeの批評の峻烈さや、Longfellowや彼自身にも向けられた plagiarism に関する病的な obsession や、又彼の *A Fable for Critics* (1849) への苛責ない批評などからPoeに反感を抱くに至ったものらしい。Lowellは *A Fable for Critics* の中でもPoeに言及した

There comes Poe; with his raven, like Barnaby Rudge,
Three fifth of him genius and two fifth sheer judge,

に始まる有名な一節の最後で、

But the heart somehow seems all squeezed out by the mind.

と詠っている所を見てもLowellのPoeへの総評は知に勝って情に欠ける所ありとして、Poeの人間的偏ばを指弾する方に傾いた感がある。しかしこのことはPoeが死後も彼に反感をもつ批評家から、その毒舌性や、個人的好悪の感情のつよさ、New Englandへの偏見等をあげて手きびしく批評の上で、いわば報復されるにいたった原因の一つであった。生前のPoeへの批評が冷たかったのはPoeの人間的資質への倫理的判断が多分にこれにあづかっていたということに異論はないようである。

Poeの死から100年記念祭にかけての評価

1849年10月7日PoeはBaltimoreの病院で多難の生涯を終っている。悲報は当のBaltimore市でも *The Sun* 誌、*The Crier* 誌等が簡単にこれを伝えたにすぎなかった。同月9日 *The New York Journal of Commerce* の論説は、

Few men were his equals. He stands in a position among our poets and prose writers which has made him the envy of many and the admiration of all. . . . During the early part of his life he wandered around the world wasting the energies of a noble mind. Subsequently he returned to his native country, but his heart seemed to have become embittered by the experiences of life, and his hand to be against every man. Hence, he was better known as a *severe* critic than otherwise; yet Mr. Poe had a warm and noble heart, as those who best knew him can testify. . . .

云々と分別もあり、礼節もある追悼文を掲げている。しかるに墓の土も乾かぬ同日の *New-York Tribune* の夕刊に “Ludwig” という署名の下に死者に鞭打つ態の誹謗が現われた。手記は Poe の literary executor となった Griswold その人のものである。

Edgar Poe is dead. He died in Baltimore the day before yesterday. This announcement will startle many, but few will be grieved by it. The part was known, personally, or by reputation, in all this country; he had readers in England, and in several of the states of Continental Europe; but he had few or no friends; and the regrets for his death will be suggested principally by the consideration that in him literary art has lost one of its most brilliant but erratic stars. . . .

手記は以上のような文で始まっている。更に彼はこの手記の中に Bulwer の小説、*The Caxtons* の中の悪徳の人 Francis Vivian の人物描写の個所を殆どそのまま引用して、これを Poe の肖像とした。煩わしさをいとわずその部分をここに引用すると、

He was in many respects like Francis Vivian in Bulwer's novel of the “Caxtons.” “Passion, in him, comprehended many of the worst emotions which militate against human happiness. You could not contradict him, but you raised quick choler; you could not speak of wealth, but his cheek paled with gnawing envy. The astonishing natural advantages of this poor boy—his beauty, his readiness, the daring spirit that breathed around him like a fiery atmosphere—had raised his constitutional self-confidence into an arrogance that turned his very claims to admiration into prejudices against him. Irascible, envious—bad enough, but not the worst, for these salient angles were all varnished over with a cold repellent cynicism, his passions vented themselves in sneers. There seemed to him no moral susceptibility; and, what was more remarkable in a proud nature, little or nothing of the true point of honor. He had, to a morbid excess, that desire to rise which is vulgarly called ambition, but no wish for the esteem or the love of his species: only the hard wish to succeed—not shine, not serve—succeed, that he might have the right to despise a world which galled his self-conceit.

この悪意と誹謗にみちた Griswold の手記は 1850 年彼の編纂になる *The Works of the Late Edgar Allan Poe*. 4 vols. に添えられた 35 頁にわたる “Memoir” とともに、Poe の人物評価の上に拭い去りがたい汚辱を印したものであり、しかも今世紀に至るまでも権威ある資料として到る所で引用されて来た。従って死後数 10 年の評価は Poe の人物や個性に関心が集中され、ついで人物評の材料としてその作品が云々される傾向があった。そして如上の Griswold 説に従ってそのまま信じられてきた人間 Poe への道徳的判断が多分に芸術的評価を歪める原因となり、Poe の作品の異常性、悖徳や、病的なものの追究さえしばしば彼自身の個性の反映として取上げられたことが特長とされるであろう。この間アメリカが Poe を誇るに足る作家と考えなかったとすれば、それは、

It is only because the strange moral obliquity of the man has steeled the hearts of his countryman against that pride.¹⁸⁾

という評言をもって代表されるであろう。

以上のような Griswold の誹謗に対して Poe に好意的な生前の友人、批評家、女友達から非難と攻撃の火の手があがったが、中でも Poe を先に編集者としてむかえた *Graham's* 誌の主宰者 George Graham は 1850 年版の Poe 全集の中に収められた N. P. Willis の Poe を偲ぶ友誼にみちた記事¹⁹⁾ に共鳴して、彼に宛てた書簡のなかで、彼自身 Poe の直接的な友人の一人として first-hand な材料をもとに、Griswold の悪意にみちた歪曲に対してきびしい詰責と遺憾の意を表している。その真卒な筆致には不当に歪められた死者の肖像に接した歎きと擁護への決意のほどがうかがわれて単なる一片の同情から書かれたものでないことは肯けると思う。

I know Mr. Poe well—far better than Mr. Griswold; and by the memory of old times, when he was an editor of “Graham,” I pronounce this exceedingly ill-timed and unappreciative estimate of the character of our lost friend *unfair and untrue*. It must have been made in a moment of spleen, written out and laid aside, and handed to the printer when his death was announced, with a sort of chuckle. It is Mr. Poe, as seen by the writer while laboring under a fit of the nightmare; but so dark a picture has no resemblance to the *living* man. Accompanying these beautiful volumes, it is an immortal infamy—the death’s head over the entrance to the garden of beauty

—a horror that clings to the brow of morning, whispering of murder. It haunts the memory through every page of his writings, leaving upon the heart a sensation of utter gloom, a feeling almost of terror. The only relief we feel, is in knowing that it is not true—that it is a fancy sketch of a perverted, jaundiced vision. The man who could deliberately say of Edgar Allan Poe, in a notice of his life and writings, prefacing the volumes which were to become a priceless souvenir to all who loved him—that his death might startle many, “*but that few would be grieved by it*”—and blast the whole fame of the man by such a paragraph as follows, is a judge dishonored. He is not Mr. Poe’s peer, and I challenge him before the country, even as a juror in the case.²⁰⁾

その他 N. P. Willis, Mrs. Sarah Whitman, George W. Peck, John Neal, C. C. Burr 等々が Poe の擁護論を行っているが、Burr が彼の季刊誌 *The Nineteenth Century* に寄せた一文は、人間心理の深淵を追究した近代作家 Poe の的を射た分析であると同時に、当時としては珍しく芸術作品と人物の評価をはっきり区別して、作品に描かれたものを通して作家の人的評価を云々する当時の批評家の道德主義に一矢報いていて面白い。

I know that an attempt has been made by the enemies of Poe, to show that he was ‘without heart;’ and even a contemporary whom we must acquit of any malice in the charge, has sung:

“But the heart somehow seems all squeezed out by the mind.”

Poe was undoubtedly the greatest *artist* among modern authors, and it is his consummate skill as an artist, that has led to these mistakes about the properties of his own heart. That perfection of horror which abounds in his writings, has been unjustly attributed to some moral defect in the man. But I perceive not why the competent critic should fall into this error. Of all authors, ancient or modern, Poe has given us the least of himself in his works. *He wrote as an artist.* He intuitively saw what Schiller has so well expressed, that it is an universal phenomenon of our nature that the mournful, the fearful, even the horrible, allures with irresistible enchantment. He probed this general psychological law, in its subtle windings through the mystic chambers of our being, as it was never probed before, until he stood in the very abyss of its centre, the sole master of its effects.²¹⁾

このようにアメリカ内部でも Griswold への反撃は数多の Poe 関係者から試みられたにも拘らず、何故それらの意見を封殺して Griswold の “Memoir” が Poe 批評の資料として内外に公認されていたかについては、Poe 擁護の諸批評が雑誌に掲載された以上の形では行きわたらなかったのに反して、“Memoir” は Poe の死後最初に現われた彼の literary

executor の手記として Poe 全集の出るたびに何らかの形でついて廻ったからであり、Poe について first-hand な知識をもたぬ批評家や、伝記作者がこれを疑う余地なき真実として採用したからである。アメリカのみならずイギリスの Poe の評価もおほむね Griswold 説を踏襲するか、これを更に誇張するかであったが、最初に Griswold 説に疑問を提出したのは W. Moy Thomas²²⁾ であり、更に Poe の名誉挽回のため熱烈な擁護をしてその成果をおさめた第一人者は John Ingram であった。1874 年から 75 年にかけて 90 頁に及ぶ伝記的序文を附した Poe 選集²³⁾ が出、ついで 1880 年に「伝記」*Life and Letters of Edgar Allan Poe* が出るに至って、アメリカ内部では論争の渦がおこり、Poe の生涯に関して新しい検討が試みられることとなった。Ingram の修正はアメリカ内外にあった Poe 擁護論の一つの頂点を示すものと見てもよく、Griswold の“Memoir”は権威を失墜した形となった。爾後の Poe の評価は Griswold の見解を依然として固執するものと、Ingram の修正論に同調するものと二つの陣営が分たれることとなる。ただ注目すべきことは、この Poe 擁護の試みがアメリカ内部において勢力を得ず、Griswold 的見方がまかり通っていたのに対して、かえってイギリスによってその説を圧倒する修正論の initiative を握られたことである。イギリスとしても文学に倫理性を強調する点ではアメリカに劣らず、現在でも Poe はイギリスで正当な評価を得ているとは思われないが、この事柄は当時のアメリカ文壇にいかに New England の清教徒精神が深く滲透しており、Griswold が聖職者でもあり、有力な知識人であったこととも相俟って、Poe 擁護の諸説がその圧力の下に屈し、Poe が追放者ともいふべき立場に甘んじなければならなかった間の消息を物語るものであろう。

1875 年、Poe の死後 27 年をへて始めて彼の記念碑が Baltimore に立てられた。この薄倖な詩人の墓碑を立てるのに尽力したのは同市の学校の女教師たちで、基金をあつめるのに 10 年の歳月を要したが、その間知名のアメリカの文学者は誰一人として募金援助の手をさしのべるものがなかった消息を H. L. Mencken が *Prejudices* の中で精細につたえている。

こうして名もなき Poe の愛護者たちの手で立てられた墓碑の開被式が行われたとき、当時の文学者中、老 Whitman だけがはるばる臨席したのは周知の事実だが、その際 speech を求められても固持した Whitman は式後の非公式な集いで、

For a long while and until recently, I had a distaste for Poe's writings. I wanted and still want for poetry, the clear sun shining, and fresh air blowing—the strength and power of health, not of delirium, even amid the stormiest passions—with always the background of the eternal moralities.²⁴⁾

と語って Poe の作品の病的な、異常の美に反対の立場を明らかにしたにも拘らず、Poe を偲ぶこの会に出席せずに居れぬ衝動にかられたことをも告白している。Whitman が晩年には Poe の天稟をみとめざるを得なかったことは、

Do I like Poe? At the start for many years, not; but three or four years ago I got to reading him again, reading and liking, until at last—yes, now—I feel almost convinced that he is a star of considerable magnitude, if not a sun, in the literary firmament.²⁵⁾

という様な評言によってうかがい知られよう。

1893 年 *The Critic* 誌によるアメリカの文学作品 Best Ten の決定投票の際、第一位は Emerson の *Essays* に、次位は Hawthorne の *The Scarlet Letter* にあたえられた。然し Poe は 20 票以上を得た 39 の作品中にも見出されず、又作品が全部で 20 票、又それ以上の票を得た作家の補欠リストの中にさえ加えられなかったという事実がある。イギリスの Edmund Gosse は急遽一書を *The Critic* 誌におくって、Poe を除外したのは “extraordinary and sinister” であると慨嘆して、

If I were an American, I should be inclined to call it disastrous. While every year sheds more luster on the genius of Poe among the weighty critical authorities of England, of France, of Germany, of Italy, in his own country prejudice is still so rampant that he fails to secure a paltry twenty votes.²⁷⁾

と述べ、諸外国で評判の高い自国の文学者に対して、アメリカが伝統的な偏見に禍いされて正当な敬意を払わぬ見識のなさを端的についでおり、その後も “It is understood that Edgar Allen (*sic*) Poe is still unforgiven in New England.”²⁸⁾ と Poe に対する New England の不寛容

をなげいている。

Gosse の手紙に答えて Whitman の友人 John Burroughs が、Poe の失格したのは彼の作品に愛や同情が欠けていて、Longfellow や、Whitter や、Whitman のようにアメリカ国民に親密に結びつくものがないからという理由をあげているが、²⁹⁾ このことは 1890 年代においても Poe が国士や、国民性を反映しない異質的作家としてアメリカ人に感銘をあたえず、作品の芸術性自体の評価は二の次にされていた消息を伝えるとともに、当時のアメリカの文学評価の規準や、その性質を示唆するものであろう。

1899 年、Poe の 50 年祭を記念して彼が若き日に学んだ Virginia 大学で彫刻家 Zolnay の手に成る Poe の胸像の開被式が行われた。この式で Hamilton Wright Mabie が、“Poe’s Place in American Literature”³⁰⁾ という題目で記念講演を行っている。それは広い把握力と洞察の力のある、且又 Mabie の人柄を偲ばせるに足る穩健中正な批評であるが、作家としての Poe については、

Poe’s work holds a first place in our literature, not by reason of its mass, its reality, its range, its spritual or ethical significance; but by reason of its complete and beautiful individuality, the distinction of its form and workmanship, the purity of its art.³¹⁾

又批評家としての Poe については、

His criticism was almost entirely free from that narrow localism which values a writer because he belongs to a section and not because his work belongs to literature. He brought into the field of criticism large knowledge of the best that had been done in literature, and clean perception of the principles of the art of writing.³²⁾

とのべて、Poe の芸術の獨創性と純粹性を高く評価すると共に、Poe の批評の局地的偏見にとらわれぬ自律性と正確さを強調している。Mabie は Poe が生きた時代はもとより、今も尚正しく評価される時期に至っていないと結論しているが、

By critical intention, therefore, as well as by virtue of the possession of genius, which is never provincial, Poe emancipated himself, and went far to emancipate American literature, from the narrow spirit, the partial judgment, and the inferior standards of a people not yet familiar with the best that has been thought and said in the world. To the claims of local pride he opposed

the sovereign claims of art; against the practice of the half-inspired and the wholly untrained he set the practice of the masters. When the intellectual history of the country is written he will appear as one of its foremost liberators.³³⁾

とのべて、Poe が題材手法ともに当時のアメリカの伝統と provincialism をはるかにこえて、若いアメリカの想像力を解放した先駆者と思なしている点、時代の趨勢を看破した卓見といえよう。しかし Poe のアメリカ文学史上の位置づけに関して、彼を時代からも環境からも、遊離して突如慧星のごとく現われた奇才と思なしている点では Mabie は伝統的、保守的な見方から一步も脱してはいない。

19 世紀末から今世紀にかけて、前代のアメリカの思想文化の中心であった New England の伝統と、その伝統の中軸をなしていた Protestant 的理想主義が、ヨーロッパに高まってきた科学思想の影響や、アメリカ社会の近代資本主義化の趨勢の下に次第に崩壊し、痛烈な価値評価をうけるにいたったが、この時代思潮の変化は Poe 評価の歴史にも波紋を投げたものの如く、20 世紀に入って Poe の作家及び批評家としての声名は漸次に高まっており、殊に文芸社会批評家としての Poe は新しく注目されるようになった。このことは従来の文芸批評の規準であった New England の伝統と、その局地的偏見が次第に勢力を失う一方、アメリカ自身が Poe の死後 50 余年の歴史をかえりみて、Poe の海外における popularity と、その反響の永続性とに刺戟されて自ら省みる時期に至ったことがおそらく直接の原因であったであろう。

Poe とアメリカ文学との関係にとどまらず、更に Poe とヨーロッパの近代文学との関係に着目して彼をアメリカ作家として誇るに足ると考える傾向がおこってきた証拠として、たとえば William P. Trent 教授は彼の *A History of American Literature* (1903) において Poe の近代作家としての地位について、

...in view of primacy on the Continent of Europe, his influence upon modern literature, his perfection as an artist in his two roles, and his steadily increasing fame, he is the American writer that means most to the civilized world of today, and that probably has the best chance of maintaining, if not of increasing, his hold upon posterity.³⁴⁾

とのべているが、同教授の意見は、1904年のフランスの Émile Lauvrière の *Edgar Poe. Sa vie et son oeuvre*, 2 vols. や、1908年の Palmer Cobb の *The Influence of E. T. A. Hoffmann on the Tales of Edgar Allan Poe* 等の刊行の示すような、海外における Poe 研究の漸進的な隆盛や、Poe と他のヨーロッパ作家との比較研究の傾向と相まって、如上の Poe 再評価の機運を裏書きするものの如く思われる。

尚 20 世紀に入って Poe の評価が次第に好転してきた例を別にあげるならば、New England の批評家 Barrett Wendell, Poe の伝記作家 G. E. Woodberry, W. C. Brownell 等、Poe に決して同情的ではなかった人々の意見が次第に軟化してきたことである。たとえば Wendell は 1893 年に Vassar 大学における講演の中で Poe に言及して “fantastic and meretricious throughout” と評し、

As one knows him better, one does not love him more. In another way, though, one grows to care for him, or at least to pity him. For with all his falsity, with all his impudence and sham, the man is a man by himself.³⁵⁾

と端的に反感を表明している。又 1900 年刊行の「アメリカ文学史」の中で “Poe... begins to seem quite as important as any of his contemporaries.” と一方に Poe の天稟をみとめながら尚、“always a waif and a stray, essentially a Bohemian” といつて、Poe の出生や、貧困、社会的身分の不確さなどを問題にしている点「お上品な伝統」の snobbish な臭気が紛々である。しかるに 1909 年この Harvard 教授が Virginia 大学における Poe の 100 年祭に招かれたときの記念講演 “The Nationalism of Poe” の中では、時代の霧をこえて益々明らかに増してゆく Poe の世界的な名声を認めざるを得なくなったものの如く、

There is no longer room for any manner of question that the work of Poe is among the still few claims which America can as yet urge unchallenged in proof that our country has enriched the literature of the world. Even with no other reason than this, loyal American must already unite in cherishing his memory.³⁶⁾

とのべ、“We may grow more confident than ever. We may unhesitatingly assert Poe not only American, but great...”³⁷⁾ と Poe

を始めて賞揚するにいたっている。そして又次のような一節

The literature of New England, in brief, American though we may gladly assert it in its nobler phrases, is, first of all, not American or national, but local. . . . Whatever the positive merit, whatever the sturdy honesty of most American expression in the nineteenth century, it lacked conciliatory breadth of feeling. Its intensity of localism marks it, whatever the peacefulness of its outward guise, as the utterance of a fatally discordant time.³⁸⁾

は、彼の 1900 年版「アメリカ文学史」の立場から転じて、New England 文学に代表される、従来のアメリカ文学の局地性を自ら肯定したことを示しており、他方

Among the enduring writers of nineteenth century America, Poe stands unique. Inevitably of his country and of his time, he eludes all limitations of more narrow scope or circumstance. Of all, I believe, he is the only one to whom, in his own day, all America might confidently have turned, as all America may confidently turn still, and forever, with certainty of finding no line, no word, no quiver of thought or of feeling which should arouse or revive the consciousness or the memory of our tragic national discords, now happily for all of us heroic matters of the past. . . . In the temperamental history of our country, it is he, and he alone, as yet, who is not local but surely enduringly national in the full range of his appeal.³⁹⁾

とのべている所を見ると、最初の頃の Poe に対する New England 的な偏見から大幅に譲歩して、かえって Poe に地方的な伝統や気質から全く独立した、国家的作家としての意義を認めるに至ったことが分る。以上の事柄は彼のアメリカ文学観の新しい転換を証明するものであると同時に、彼の拠って立つ New England の局地性をはっきり認めざるを得なくなった時代の推移と、アメリカ文学の新しい地域的展開を意味するものでなくてはならない。

1908 年、1 月 19 日を期して Poe の 100 年祭がアメリカ南北を通じて各地で盛大に催され、多数の人がこれに参加した。之は死後 50 年を経て全国的に Poe への関心が高まっていることを示し、Boston の作家クラブ、Columbia, New York, The Johns Hopkins 等の大学で記念祭が催された中最も本格的であったのは Poe の出身校 Virginia 大学であった。このとき前記の Wendell 教授が Harvard 大学から、C. Alphonso Smith 教授が North Carolina 大学から、その他ドイツ、フランス等をも

含めた各地から代表を送り、3 日間におたる盛大な式と講演が行われた。この諸講演の中、Smith の “The Americanism of Poe” はアメリカの Poe 評価の推移という観点からは興味ふかい示唆が見出される。講演の趣旨は Poe を国家的作家として位置づけようとする試みで、Poe の伝統的な見方、即ち Poe がアメリカの国土から全く遊離した作家であり、その作品に国土的背景、歴史や社会、又は国民性の反映が殆ど皆無であるという意見に批判的な立場をとり、Poe のアメリカ的特質を作品の内容や、題材ではなく、彼の創作の態度や方法の中に指摘している点当時としては original な革新的意見と考えてもよい。即ち Smith は先に Virginia 大学で Zolnay の Poe 胸像の開被式の折、Hamilton Mabie が Poe のアメリカ文学史上の立場を孤立的なものとして、

It is the first and perhaps the most obvious distinction of Edgar Allan Poe that his creative work baffles all attempts to relate it historically to antecedent condition: that it detached itself almost completely from the time and place in which it made its appearance, and sprang suddenly and mysteriously from a soil which had never borne its like before.⁴⁰⁾

と説いている趣旨は現在に至るまでも大局的には変らぬ Poe 観を踏襲したものであるが、Smith はこれに異議を唱え、Poe がアメリカの地方の風物や、アメリカ的な人物や題材を選ばなかったことは必ずしも彼が環境や、国民性から孤立していることの証左にはならぬ、寧ろ Poe の Americanism は彼の作品を取扱う方法と技術に見出すべきだと主張し、次のようにいっている。

Poe's Americanism is to be sought not in his idealism but in the sure craftsmanship, the conscious adaptation of means to end, the quick realization of structural possibilities, the practical handling of details, which enabled him to body forth his visions in enduring forms and thus to found the only new type of literature that America has originated.⁴¹⁾

周知のように Poe がもっとも心を砕いたのは、作品の構成という点であり、構成技術の精練によって作品に完璧な形式をあたえることであった。このために彼は天賦の強味であった分析能力を駆使して効果を目的とする表現技巧の法則を探り出し、形式のために役立つ素材が一つとしてあってはならぬという、Franklin の節約にも匹敵すべき厳密な素材の economy

を行い、全体的な効果に向って一切の個々の素材を収斂させて行った。いわば Poe は「最少の手段をもっていかに最大の効果を生み出すか」ということを常に意識的に計算していた作家であった。このような科学的合理性と、功利的ともいい得べき実際性が Poe の中には並存しており、Poe は Smith にいはせれば、これらのアメリカ的特質を文学方法に適用して近代的な文学の規準を樹立したのである。Smith はこのことはアメリカ文学上で前例のない試みであり、政治や産業の領域で試みられていたことを文学分野で成し遂げた点に、近代の文学技術の先駆者としての Poe の功績をみとめている。更に Smith は Poe の中に幾つかの南部的特質をあげ、例えば当時南部に盛んであった Coleridge への憧憬と、彼の Poe に及ぼした影響、当時 New England より長く南部に残存していた文学上の classicism と Poe の文学理論の古典性、現在以上に当時の南部に濃厚であった個人の独立性の意識というごとき要素を指摘して Poe が南部の思潮の傾向を反映するものと考えている。要するに Smith は従来 of 批評家が Poe に求めて失敗した、作品中の思想、人生批判や人間形成の倫理等に特長を求めず、文学の構成技術への貢献を強調して、科学的、構成的、実際的な精神の中にアメリカ的特質を見出した点で、従来アメリカに一般であった倫理的 Poe 観に対立する新しい近代的解釈を試みたものであり、又 Poe を南部の文化的背景の上に浮び上らせようとした試みも南部の Poe 研究者によって提出された、興味ある示唆を含む命題であったといえる。

以上主としてアメリカにおける Poe の諸評価の変遷を、生前から 100 年祭にいたるまで概説したが、要約すれば Poe の死後約半世紀の間の評価は人間 Poe の倫理的判断が論議の中心となった感があり、彼の生涯はさまざまな伝說的風評によって醜悪化される一方、浪漫的に美化されもし、Poe をめぐる賛否両論に拍車をかける結果となった。これは 19 世紀末までアメリカの文学思潮を強力に支配し、且つ次第に固定化しつつあった Puritanism の伝統の影響に外ならず、その倫理的理想主義が Poe の作品の芸術としての理解と評価とをはばんできたことに由来する。しかし科学

と技術の世紀と見なされる 20 世紀に入って、Poe の人間及び作品が様々な角度から再検討された結果、Poe の近代性とある意味での世界性が浮彫にされ、創造的、pioneer 的な近代作家としての意義を賦与されるにいたったのである。たとえば Poe の芸術論、又その忠実な実践としての詩や物語は、彼が近代文学の出発点ともいべき自意識と、批評精神に貫かれた知的作家であったことを示してくれるし、それは又世紀末の decadance や symbolism の芸術の先駆となった。又彼の詩論は Valéry にいたって精緻の頂点に達した「純粹詩」の主張の prototype であったといえる。更に見方を変えれば、文体、形式、用語に極度に厳密な関心を払った Poe は当今の New Criticism の pioneer であったともいえるであろう。又物語における人物の病的な神経や異常心理の解析は、Dostoievsky, James, Bourget 等を結ぶ近代の心理的リアリズムに病理学的な面から一役買つてもいる。又一方 Poe 個人への評価についても 20 世紀の精神病理学はこれまでその結果として現われ、非難の対象となった彼の所謂道徳的欠陥の原因を Poe の精神の内に探ることによって、彼自身たたかって常に敗れるように定められた遺伝的精神病質の所有者であったことを明るみに出していることは、人間 Poe の評価に側面から新しい近代的解明をあたえることになったといえるであろう。

Poe のアメリカ文壇に対する批判

Poe が同時代の人々、及びその後のアメリカ文壇でも久しい間不評がちであった理由について今少し具体的に検討してみよう。

その理由は先づ Poe が当時 New England を中心とするアメリカの社会文化のあり方に極めて批判的乃至叛逆的な態度を表明して憚らなかつたからである。Poe が New England の文化伝統を嫌って Boston を Frogpond と嘲り、自らは Virginia 紳士を理想として pause していたことは周知である。彼は Emerson や Lowell のように人間の完全性や、人間社会の進歩への信念に共鳴するにはあまりに pessimistic であり、従って改革と進歩の精神を基調とする New England 文学に同調しえな

ったのは当然であった。この Poe の態度は当時の南部の北部に対する不信と懐疑、北部の急進的なものに対する南部一般の保守的傾向を反映するものと見なすことが出来る。たとえば 1844 年 7 月 Poe が Lowell にあてた書簡には人間の完全性を否定する次のような一節が見出される。

I have no faith in human perfectibility. I think that human exertion will have no appreciable effect upon humanity. Man is now only more active—not more happy—nor more wise, than he was 6000 years ago. The result will never vary—and to suppose that it will, is to suppose that the foregone man has lived in vain—that the foregone time is but the rudiment of the future—that the myriads who have perished have not been upon equal footing with ourselves—nor are we with our posterity.⁴²⁾

そして又当時の南部には Poe のような懐疑派が少くなかったことは、当時の南部の雑誌に Poe を代弁するかのような悲観的言説が見出されることがその一端を物語っている。

The doctrine of perfectibility was a dream of the last century; it is a folly in this. . . . Man remains essentially the same throughout the shifting career in which he is exhibited by history. . . . Optimism of any kind is always a mark of intellectual inbecility.⁴³⁾

又 Poe は当時のアメリカの democracy に不信を表明し、これを衆愚の政治とみなして、優れた個人を鳥合の衆の中に埋没させる民主主義の危険に言及して自らは貴族主義的個人主義を標榜したこと、又女性を美と愛の権化として騎士的献身を惜しまぬ一方、Margaret Fuller 等の青杏派女性を敬遠するなど、Poe の見解は保主的な南部の伝統に拠ると考えられる面が多く、支配的な北部の思潮と全く対立するものであった。然るに当時すべての文学活動は北部に集中しており、南部よりは北部に根拠をおく方が遙かに有利であったにも拘らず、以上のような Poe の反 New England の態度が彼の立場を極めて不利にしていたであろうことは想像するにたかくない。

次に、Poe は前記のように南部的特質をその気質や見解のうちに蔵しながら、南部人としての偏見や、provincialism に立てこもることがなく、Virginia にいた頃も南部の北部に対する偏見をかえって歎いたこともある。又作品中に南部の風物や歴史、文化社会の情勢を描き入れることは殆

どなく、いわば北部同様南部の伝統にも栄光をあたえようとしなかったため、南部の読者層にも appeal しえなかったこと、かつ又読者側の芸術鑑賞力も Poe 作品に追従するだけの水準に達していなかったことも無論 Poe の過少評価の原因となったであろう。してみると Poe のように身を高く持して己が道をゆくことに忠実であった作家には当時北部にも南部にも安んじて身を置く場所がなかったということになる。

すべての先駆者の例にもれず、Poe の往った道も独立孤高の、茨多き道ではあったが、それは必ずしも彼が当時の社会情勢や、文学界への関心から遠去かっていた存在であったことにはならぬと思う。かえって彼の一部の作品や、“Marginalia” その他の評論をとおしてみられる彼はアメリカの現状に対して強い関心と要望をもった社会及び文芸批評家であったことを示してくれる。

Poe にとっては当時のアメリカ一般の知性乃至芸術的意識の貧困さにかんがみて、いかに真の知性の権威を、彼自身の言葉をかりれば “aristocracy of intellect”⁴⁴⁾ を樹立し、又いかに芸術としての文学を独立させるかが当面の課題であり、その事は又同時に文学者が経済的により安定した、又社会的により権威ある地位を獲得することに通じていた。

政治的な独立後日の浅い 19 世紀前半のアメリカは、国家建設という practical な問題に国をあげて邁進する必要のあった時代で、純文学の存在意義は極めて稀薄であり、従って職業作家として筆一本で立つことは殆ど不可能であった。事実北部南部を通じて文筆に従事するものは他に定職をもつ素人作家か、さもなくば余程富裕で、文筆からの収入を期待する必要のないものかどちらかであるのが一般であった。しかるに Poe は生涯他の職業に依存することを望まず、しかも詩と物語のみでは糊口をつなぐことが出来ぬため、journalist として一種の売文を強いられつつ、一生貧困から見離されることがなかったのは当然の帰結である。そのような Poe であったからこそ、当時のアメリカ文学者の直面する実際的な諸問題に対して彼ほど尖鋭な意識をもち、火急な問題として敏感な反応を示した作家はいなかったであろう。Poe は 1836 年の *The Messenger* 誌上に寄せた

新刊批評の中で、民衆の芸術家に対する無関心と過少評価をなげいて居り、

When shall the artist assume his proper situation in society—in a society of thinking beings? How long shall he be enslaved? How long shall mind succumb to the grossest materiality? How long shall the veriest vermin of the earth, who crawl around the altar of Mammon, be more esteemed of men than they, the gifted ministers to those exalted emotions which link us with the mysteries of Heaven? To our own query we may venture a reply. Not long. Not long will such rank injustice be committed or permitted. A spirit is already abroad at war with it.⁴⁵⁾

と述べているのは、ドルと物質を謳歌して精神的知的貧困をかえりみず、芸術家に正当な敬意を払おうとしない社会の俗物性に挑戦の一矢を放ったものである。

Poe はアメリカに真の文学の独立、及び文学者の権威の確立をはかるために何を要望したか。それは先づ第一に対外的には外国特に英国の文学伝統から脱却すること、第二には国際著作権法を確立させること、第三には国内の問題としてアメリカ文学を New England の局地的文学から解放して全地域を包容する真の国家的文学とすること、第四には Poe 自身が自己の信念を吐露して民衆を啓蒙すべく、雑誌を自ら主宰し刊行することであった。

当時のアメリカ文壇は政治的独立後も久しく英国の文学伝統に追従して形式精神ともに模倣の域を脱せず、自国の文学作品の評価も英国文壇の言論に左右される有様であった。この現状を Poe は屢々憤ってこの隷属状態から速かに自己解放を行うことを要望していた。又国際著作権法が樹立していないため、外国作家に印税を払わずアメリカ国内で自由に出版出来るということが、自国作家の文学市場への進出を阻害すること多大であり、又外国の批評の圧力がアメリカ固有の文学規準や方針を不安定な状態のままに留めている事実、Poe はいち早く着眼した。事実外国の文学作品や、歴史、批評など題材精神ともにアメリカ固有のものならぬ書物が廉価本で際限なく出版されていて、たとえば *Harper's* 誌のごとき有力な雑誌が 1842 年に 600 冊以上の小説文庫を出した際、アメリカ作家の作品はその中僅か 10 冊足らずであったという事実でも、いかにアメリカ文学への外

国の圧力が強かったかが分る。このようにして営利本位の出版業者はアメリカの作家の進出に積極的な協力を示さず、彼らに支払われる報酬も驚くほど零細な額にすぎなかった。作家はこの商業主義に太刀打ちすべくもなく、自作を出版してもらえること自体が恩恵に値いする状態であった。このような事実は当然、出版業者に対する文学者の立場を不本意に卑屈なものに引き下げずには居らぬという結果を生む。従って国際著作権法の樹立はアメリカ文学者の権威確立ということにも間接に通ずることであった。因みにこの著作権法の改革は Poe の死後 40 年余をへて実施されたが、Poe は半世紀近く前にこの必要を痛感していたわけである。

第三にアメリカ文学が真の国家的文学となるためには局地性から脱却せねばならぬ。Poe は New England の文学がアメリカ文学そのものであるかの如き観を呈し、他の section に対して優越と排他的な態度をもって臨むことに不満を抱いた。たとえば彼は Lowell の *A Fable for Critics* が Poe 自身への諷刺以外に南部の作家に全く触れていないこと、⁴⁶⁾ Griswold の *Poets and Poetry of America* の New England 偏重⁴⁷⁾をも憤慨している。

Poe はアメリカ文壇から外国文学の勢力を駆逐するとともに、国内の provincialism をも排し、之に代うるにより包括的な国家的文学を涵養することを念願としたが、そのためにはまだ混沌状態から脱しえない自国文学に指針をあたえるに足る、強力な文学批評を發展させることが急務であった。それが実際問題として自分自身が主宰して、如上の理想を遂行しうる雑誌をもち、偏見のない、独立自存の文学批評の拠所をきづく終生の努力となって現われたのである。彼が刊行しようとして資金調達の困難のため実現しなかった *The Penn Magazine* や、*The Stylus* は Poe の誇大妄想として片付けられがちであったが、これらの雑誌発刊の prospectus を読むと、この線に沿う彼の理想が具体的に明らかにされている。その理想として先づ彼は純然たる芸術の法則にのみ導かれる独立自存の批評の権利を主張している。そのため批評はあくまで個人的な偏見、作家の vanity、党派の潜越、伝統的な偏見から切り離されたものでなければならぬ。第二に

は批評は他国の批評の支配を受けず、それ自身の多面性 *versatility*、独創性 *originality*、鋭さ *pungency* によって人をたのしませるものでなくてはならぬ。第三には特定の地域に限らず、国内のすべての地域を打って一丸となしうる融通性をもったものであること、従ってそれは既成作家の特権のためならず、アメリカの真の「知性」のために公平無私な機会をあたえるごときものでなくてはならない。そして又彼が “. . . regarding the world at large as the sole proper audience for the author.”⁴⁸⁾ とくり返して強調している点は注目すべく、そこに単にアメリカ国内のみならず、「世界を舞台とする」自国文学の発展を夢みていた Poe の野心と着眼の高さがうかがわれる。してみると Poe が New England 中心の文学の局地性や、外国追従の風潮を攻撃したのは Poe の見解が地域的な *provincialism* に拠ったものでもなく、又狭い意味の排他的な国家主義を標榜したものとも考えられない。彼がすぐれた作品に関する限り、アメリカ国内と国外との別なく賞讃を惜しんでいない事実を思い合せても、却って Poe の批評の知的水準や視野が当時のアメリカ一般のそれらを凌駕していたと見る方が正しいと思われる。Poe が *journalistic* な批評家の常として次々現われる作品の時評にいとまなく、批評に歴史的意識を欠いており、時間的な *provincialism* に陥る傾向のあったことは否めないにしても、かつて Henry James の Poe の批評に呈した “It is probably the most complete and exquisite specimen of *provincialism* ever prepared for the edification of men.”⁴⁹⁾ という評言は必ずしも的を射ているとは思われない。

以上のような観点から見れば、Poe は 19 世紀前半の、まだ自覚の域に達せぬアメリカの文学界に衿持と独立心を要望し、自ら設定した近代的批評の規準によって自他の作品を律しようとして、正々堂々と舌戦にのぞんだ警世の批評家であるとともに、純然たる文筆家として芸術に冷淡であった環境の中で、経済生活の困難に耐えつづけた勇気と *pride* とは高く評価されてもよく、この一面を追究するとき人物評価の蔭にかくれてとかく見遁されがちであった Poe のアメリカ文壇に対する作家並びに批評家としての良心と、予言的明察が見出されるのではなからうか。Poe があの時代の

アメリカの国土に生まれていなかったら、と悲運を惜しむ声も屢々聞かれるにも拘らず、1830年代から40年代のアメリカほど、Poeのごとき文学者を必要とした時も場所もなかったといえるかも知れない。又彼がもし40才の若さで坐折せず、彼の生活態度が今少し慎重着実であって、万一彼の宿願であった雑誌刊行の計画が実現していたならば、彼はアメリカ文学史上に尚大きな貢献をなしえていたにちがいない。この先見の批評家Poeの業績に関してNorman Douglasの言葉をかりるならば、

There is Poe the American, whose patriotic labours have perhaps not been sufficiently appreciated by his countrymen. It is not easy nowadays, to realize the low position which American letters then occupied in the world's opinion and the slavish adulation with which every product from the European literary market was greeted in the United States; not easy, therefore, to estimate the extent of Poe's labours. . . . How he encouraged American authors of every stamp, coaxed them, drove them, pushed them the way they should go. Some talk of his "regrettable scarification of the New York *literati*" They must have been a thin-skinned generation, these *literati* ¹⁵⁰⁾

こうしてPoeの死後約半世紀ののち、アメリカ文学がNew England中心の局地的文学から、より広範囲な地域を包括する国家的文学へと転身を行い、さらに国際的水準にまで達しつつある現今、Poeのpioneer的な意義が新しい評価の光を浴びることになったのも肯なるかなといえよう。

註

- 1) "Edgar Allan Poe" in *The South in American Literature*, Duke Univ., 1954. P. 547.
- 2-5) *Current Literature*, XXXIX, pp. 613-14.
- 6) The Griswold's "Memoir" is included in *The Works of the Late Edgar Allan Poe*; it was first published in Vol. III in 1850 and was afterwards transferred to Vol. I.
- 7) Quinn, *Edgar Allan Poe: A Critical Biography*, pp. 444-50, 279-82.
- 8) *The New York Times Book Review*, August 6, 1944.
- 9) *The Yankee and Boston Literary Gazette*, III, p. 168.
- 10) *The Knickerbocker*, XXIV, 69, January, 1846.
- 11) *The Baltimore Saturday Visiter*, October 12, 1833.
- 12) *Ibid.*, April 2, 1842.
- 13) *Ibid.*, April 26, 1845.
- 14-16) *Graham's Magazine*, XXVII, 49-53, February, 1845.
- 17) *Poe's Works*, ed. Griswold, Vol. I, New York, 1850-1856.

- 18) *The Canadian Journal of Industry, Science, and Art*, March, 1857.
- 19) "Death of Edgar A. Poe"; it was first published in the *Home Journal* for October 20, 1849, and was included in the Griswold's edition of *Poe's Works*, Vol. I. in 1850.
- 20) *Graham's Magazine*, March, 1850.
- 21) *The Nineteenth Century*, V, pp. 23-4, February, 1852.
- 22) *The Train*, III, pp. 193-8, April, 1857.
- 23) *The Works of Edgar Allan Poe*, ed. Ingram, 4 vols., Edinburgh, 1874-1875, 1880, etc..
- 24) Whitman's "Edgar Poe's Significance." See *the Critic* II, June 3, 1882.
- 25) Horace L. Traubel's *With Whitman in Camden*, (3 vols., 1906-1914) III, pp. 138-9. This statement of Whitman's was made to Traubel in 1888.
- 26) *The Critic*, n. s. XIX, pp. 341 and 357 (May 27 and June 3, 1893).
- 27) *Ibid.*, n. s. XX, p. 78, July 29, 1893.
- 28) *Questions at Issue*, pp. 88-90, New York, 1893.
- 29) *The Dial*, XV, pp. 214-5, October 16, 1893.
- 30) *The Unweiling of the Bust of Edgar Allan Poe*, ed. C. W. Kent, pp. 54-9.
- 31) *Ibid.*, p. 59.
- 32) *Ibid.*, p. 60.
- 33) *Ibid.*, p. 59.
- 34) Trent, *A History of American Literature*, p. 383, New York, 1903.
- 35) *Stelligeri and Other Essays*, pp. 138-40, New York, 1893.
- 36) *The Book of the Poe Centenary*, pp. 120-1, Charlottesville, Va., 1909.
- 37) *Ibid.*, p. 151.
- 38) *Ibid.*, p. 154-5.
- 39) *Ibid.*, p. 156-7.
- 40) "Poe's Place in American Literature," p. 44.
- 41) "The Americanism of Poe" in *The Book of the Poe Centenary*, p. 178.
- 42) Poe's letter to Lowell of July 2, 1844.
- 43) A review of Herbert Spencer's *Social Statics* in *the Quarterly Review* of the Southern Methodists, April, 1856.
- 44) Poe's letter to Mrs. Whitman of November, 22, 1848.
- 45) Poe's review of *Conti the Discarded* by Henry F. Chorley. *Works*, VIII, p. 230.
- 46) Poe's review of Lowell's *A Fable for Critics*. *Works*, XIII, p. 172.
- 47) Poe's review of Griswold's *The Poets and Poetry of America*. *Works*, XI, p. 125. Also see Poe's letter to Daniel Bryan of July 6, 1842.
- 48) *The Philadelphia Saturday Courier*, X, (June 13, 1840), No. 481, p. 2. Also see the *Saturday Museum* (March 4, 1843), p. 3.
- 49) James' "Hawthorne." See *The Shock of Recognition*, ed. by Edmund Wilson, (New York, 1955), p. 475.
- 50) See Douglas' *Experiments*, p. 105, London, 1926.

Bibliography

- The Complete Works of Edgar Allan Poe*, ed. by James A. Harrison, 17 vols. New York. 1902.
- The Works of the Late Edgar Allan Poe*. With a Memoir by Rufus Wilmot Griswold and Notices of his Life and Genius by N. P. Willis and J. R. Lowell, 4 vols. New York. 1850-1856.
- Ingram, John H., *Edgar Allan Poe, His Life, Letters, and Opinions*. London. 1891.
- Quinn, Arthur Hobson, *Edgar Allan Poe: A Critical Biography*. New York. 1941.
- The Letters of Edgar Allan Poe*, edited by John Ward Ostrom, 2 vols. Cambridge. 1948.
- Campbell, Killis, *The Mind of Poe and Other Studies*. Cambridge. 1932.
- Hubbell, Jay B., *The South in American Literature: 1607-1900*. Durham, North Carolina. 1954.
- The Book of the Poe Centenary*, ed. by Charles W. Kent. Charlottesville, Va. 1909.
- The Shock of Recognition*, ed. by Edmund Wilson. New York. 1943, 1955.
- Wendell, Barrett, *A Literary History of America*. New York. 1900.
- Trent, William, P., *A History of American Literature, 1607-1865*. New York. 1903.